

2023 ズバリ! 的中



古文

関西大学

入試問題本文が一致、かつ問内容が複数個所の中

入試問題

2月2日実施 全学日程1
二 問3、問5、問8

河合塾

高3 II期
高三 関関同立大古文
第八講 問二、問四、問十三

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

かかるほどに、世の中にいとけしからぬことを言ひ出でたるや、それは、源氏の左大臣の、式部卿宮の御事を思ひ、朝廷を傾けたまつらんと思しかまふといふこと出で来て、世にいと聞きにくくのしる。①「いでや、よにさるけしからぬことあらじ」など、世人申し思ふほどに、仏神の御ゆるしにや、②げに御心の中にもあるまじき御心やありけん、三月二十六日にこの左大臣殿に檢非違使うち開みて、宣命、読みのしりて、「朝廷を傾けたまつらんとかまふる罪によりて、大宰権御になして流し遣はす」といふことを読みのしる。今は御位もなき定なればとて、網代車に乗せてまつりて、ただ行きに奉てたまつれば、式部卿宮の御心地、おほかたならんにてだにみじと思さるべきに、まいてわが御事によりて出で来たること思すに、せむ方なく思されて、われもわれもと出で立ち騒がせたまふ。北の方、御女、男君達、いへばおろかなる殿の内の有様なり、思ひやるべし。昔昔原の大臣の流されたまへるをこそ、世の物語に聞こしめししか、これはあさましいみじき目を見て、あきれまどひて、みな泣き騒ぎたまふも悲し。男君達の冠などしたまへるも、後れじ後れじと感ひたまへるも、あへて寄せつたてまつらず。ただあるがなかの弟にて、童なる君の、殿の御候はなれたまはぬぞ、泣きののしりて感ひたまへば、

〔又七〕

二次の文章は『栄花物語』の一節である。村上帝の崩御により、皇太子であった冷泉帝が即位した。冷泉帝は、当時十八歳で心に病をかかえていた。東宮には、村上帝の第四皇子であり、左大臣・源高明(本文中では源氏の左大臣)の娘の婿であった平親王(本文中では式部卿宮)が目されて、冷泉帝と同腹で第五皇子が立てられた。これを讀んで、後の問に答えよ。

帝、御ものけいとおどろおはしませば、さるべき殿上人、殿ばら、たゆまず夜狂さからひたまふ。いとけおそろしくおはしませば、「今日おりさせたまふ、明日おりさせたまふ」とのみ、聞きにくく申し思へるに、帝と申すものは、一度はのどかに、一度はとくおりさせたまふといふことも、かならずあるべきことに申し思へるに、今年(安和二年)とぞいふるに、位にて三年にこそはなせたまひぬれば、いかなるべき御有様にかのみに見えさせたまひ。

かかるほどに、世の中にいとけしからぬことを言ひ出でたるや、それは、源氏の左大臣の、式部卿宮の御事を思ひ、朝廷を傾けたまつらんと思しかまふといふこと出で来て、世にいと聞きにくくのしる。①「いでや、よにさるけしからぬことあらじ」など、世人申し思ふほどに、仏神の御ゆるしにや、げに御心の中にもあるまじき御心やありけん、三月二十六日にこの左大臣殿に檢非違使うち開みて、宣命、読みのしりて、「朝廷を傾けたまつらんとかまふる罪によりて、大宰権御になして流し遣はす」といふことを読みのしる。今は御位もなき定なればとて、網代車に乗せてまつりて、ただ行きに奉てたまつれば、式部卿宮の御心地、おほかたならんにてだにみじと思さるべきに、まいてわが御事によりて出で来たること思すに、せむかたなく思されて、われもわれもと出で立ち騒がせたまふ。北の方、御女、男君達、いへばおろかなる殿の内の有様なり、思ひやるべし。昔昔原の大臣の流されたまへるをこそ、世の物語に聞こしめししか、これはあさましいみじき目を見て、あきれまどひて、みな泣き騒ぎたまふもかなし。男君達の冠などしたまへるも、後れじ後れじと感ひたまへるも、あへて寄せつたてまつらず。ただあるがなかの弟にて、童なる君の、殿の御候はなれたまはぬぞ、泣きののしりて感ひたまへば、事のよし奏して、「さはれ、それはと許させたまふ、童なる君の、殿の御候はなれたまはぬぞ、泣きののしりて感ひたまへば、事のよし奏して、」

事のよし案じて、「さされ、それは」と許されたまふを、同じ御車にたにあらず、馬にてぞおはする。十一、二ばかりにぞおはしける、ただ今、世の中に悲しいみじき例なり。人のなくならたまふ、例のことなり、これはいとゆゆしう金髪。醍醐の帝、いみじうさかしくおはしめて、聖の帝とさへ申しし帝の第一の御子、源氏になりたまへるぞかし。かかる御有様は、世にあさましく悲しう心憂きことに、世に申しのしる。

式部卿宮、「法師にやなりなまし」と思せど、幼き宮たちのうつくしうおはします、大北の方の世をいみじきものに思いたるも、ただ今は宮一所の御蔭にかくれたまへれば、^⑬ふり捨てたまはす。いみじうあはれに悲しとも世の常なり。住ませたまふ宮のうちも、よろづに思し埋れたれば、御前の池、遺水も、水草居咽びて、心もゆかぬさまなり。さまざまにさばかり植え集め、つくろはせたまひし前栽、植木どもも、心にまかせて生ひあがり、庭も浅茅が原になりて、あはれに心細し。宮はあはれにいみじと思ししながら、くれやみにて過ぐさせたまふにも、昔の御有様恋しう、悲しうて、御直衣の袖もほりあへさせたまはず、生きながら身をかへさせたまへるぞ、あはれにたじけなき。

源氏の大臣のあるがなかのおとどの女君の、五つ六つばかりにおはするは、大臣の御はらから十五の宮の、御女もおはせざりければ、迎へとりたてまつりたまひて、姫君とてかしづきたて

だ今、世の中になくなくいみじき例なり。人のなくなりたまふ、例のことなり、これはいとゆゆしう心憂し。醍醐の帝、いみじうさかしくおはして、聖の帝とさへ申しし帝の御子、源氏になりたまへるぞかし。かかる御有様は、世にあさましくかなしく心憂きことに、世に申しのしる。

式部卿宮、「法師にやなりなまし」と思せど、幼き宮たちのうつくしうおはします。大北の方の世をいみじきものに思いたるも、ただ今は宮一所の御蔭にかくれたまへれば、えふり捨てたまはす。いみじうあはれにかなしく世の常なり。住ませたまふ宮のうちも、よろづに思し埋れたれば、御前の池、遺水も、水草居咽びて、心もゆかぬさまなり。さまざまにさばかり植え集め、つくろはせたまひし前栽、植木どもも、心にまかせて生ひあがり、庭も浅茅が原になりて、あはれに心細し。宮はあはれにいみじと思ししながら、くれやみにて過ぐさせたまふにも、昔の御有様恋しう、悲しうて、御直衣の袖もほりあへさせたまはず、生きながら身をかへさせたまへるぞ、あはれにたじけなき。

〔采花物語 月の宴による〕

注 *1 安和二年(醍醐九年)の年に安和の妻が起つた。 *2 檢非違使(京中の取り繕ま、訴訟、裁判、刑の執行などをつかさどる令外で、現在の警察官と裁判官と兼ねたような職。 *3 宣命(天皇の命令を伝える文書。 *4 綱代車(竹まとは櫛木の綱で車輪を張った牛車。主に四位、五位が常用した。 *5 菅原の大臣(菅原道真。 *6 醍醐の帝(村上天帝の父親で先代の帝。醍醐、村上兩帝の治世は聖代とされ、延喜天曆の治を呼ばれた。 *7 源氏になりし源の姓を賜つて臣籍に下る。 *8 大北の方(北の方の母親、左大臣の妻。

まつりたまひて、養ひたてまつりたまふ、それにつけても、いとあはれなるものは世なり。帥殿は法師になりたまへるとぞ聞こゆめる。

〔采花物語 月の宴より〕

(注) *源氏の左大臣——源高明(九一四—九九二)。醍醐天皇(在位八七九—九三〇)の第十皇子。本文中に「第一の皇子」とあるのは、「第一の源氏」とあるべきところか。 *式部卿宮——為平親王(九五—一〇〇)。村上天皇(在位九四六—九六七)の第四皇子。源高明の孫を養つた。冷泉天皇(在位九六七—九九九)の東宮候補として有力視されていたが実現せず。同母弟の守平親王(白河天皇、在位九九九—九九八)が立てられた。 *大宰権帥——大宰府の長官。

問一 傍線部①「ののしる」、②「ゆゆしう」、③「かしづき」はどのような意味か。最も適当なものを、それぞれ次のイ〜ホから一つ選び、その符号を答えなさい。

①	イ 馬鹿になる	ロ 罵倒する	ハ 評判がたつ	ニ ほめたまふ	ホ 狼狽する
②	イ 悲しく	ロ 急で	ハ 素晴らしく	ニ 不吉で	ホ 見事で
③	イ 監督し	ロ 大事に育て	ハ 名付け	ニ 身分を決め	ホ 召し使い

問3 三月二十六日の事件について、どのように描写されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 檢非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し進わす」との宣命を声高に読み上げ、位を召し上げた今の身分に見合った綱代車にお乗せして、お連れ申し上げた。語り手はこのことを、仏や神が見放されたからなのか、それとも左大臣のお心のうちにあつてはならないお考えがあつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。
- b 檢非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し進わす」との宣命を声高に読み上げて大臣を責め立て、流されるものための綱代車にお乗せして、お連れ申し上げた。語り手はせめて命を召されなかつたことを、仏や神のご加護があつたからだろうか、それとも左大臣がみずから望まれたことであつたのだろうか、いぶかしんでいる。
- c 檢非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し進わす」との宣命を声高に読み上げて大臣を責め立て、左大臣だった身分に見合った綱代車にお乗せして、お供申し上げた。語り手はこのことを、仏や神が見放されたからなのか、それとも左大臣がみずから望まれたことであつたのだろうか、いぶかしんでいる。
- d 檢非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し進わす」との宣命を声高に読み上げて大臣を責め立て、流されるものための綱代車にお乗せして、お供申し上げた。語り手はこのことを、仏や神が見放されたからなのか、それとも左大臣のお心のうちにあつてはならないお考えがあつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。
- e 檢非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し進わす」との宣命を声高に読み上げ、左大臣だった身分に見合った綱代車にお乗せして、お供申し上げた。語り手はせめて命を召されなかつたことを、仏や神のご加護があつたからだろうか、それとも左大臣がみずから望まれたことであつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。

問二

傍線部⑧「たてまつら」⑨「奏し」、⑩「たまふ」の敬意の対象は誰か。最も適当なものを、それぞれ次のイ～ヨから一つ選び、その符号を答えなさい（選択肢の箇所は、文中に波線を付してある。なお、同じ符号を何回用いてもよい）。

イ 源氏の左大臣 ロ 式部卿官 ハ 朝廷 ニ 仏神
ホ 檢非違使 ヘ 北の方 ト 御女 チ 男君達
リ 菅原の大臣 ヌ 重なる君 ル 醍醐の帝 ヲ 幼き百たち
ワ 大北の方 カ おとりの女君 ヱ 十五の宮

問三

傍線部⑫「さるけしからぬこと」とは、誰がどうすることか。二十五字以内で説明しなさい（句読点も字数に含むものとする）。

問四

傍線部⑬「げに御心の中にもあるまじき御心やありけん」の解釈として最も適当なものはどれか。次のイ～ホから一つ選び、その符号を答えなさい。

イ なるほど左大臣殿のお心の中にも、してはならないとお気持ちがあったのだろうか
ロ なるほど左大臣殿のお心の中にも、あつてはならないとお気持ちがあったのだろうか
ハ なるほど式部卿官のお心の中にも、してはならないとお気持ちがあったのだろうか
ニ なるほど式部卿官のお心の中にも、あつてはならないとお気持ちがあったのだろうか
ホ なるほど仏神のお心の中にも、許してはならないとお気持ちがあったのだろうか

問五

残された左大臣家の人々の様子はどのように描写されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 残された北の方や子どもたちは、たいそう呆然としてこぼも出ないほどであった。正装した子どもたちも、困惑するばかりで、車に近づくことはできなかった。ただ、幼い弟で父の懐を離れなかったものだけは、あまりにも泣きさげばれるので、父親と一緒に連れて行かれることになったが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

b 残された北の方や子どもたちは、とてもこぼもでは表現できないものであった。成人している子どもたちも、困惑するばかりで、車に近づくことはできなかった。ただ、幼い弟だけは、父の懐を離れずと泣いておられたので、父親と一緒に連れて行かれることになったが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

c 残された北の方や子どもたちは、たいそう呆然としてこぼも出ないほどであった。正装した子どもたちも、同行すると訴えられたが許されなかった。ただ、幼い弟だけは、父の懐を離れずと泣いておられたので、連れて行かれることになったが、それでも父とは別のところに馬に乗せて連れて行かれた。

d 残された北の方や子どもたちは、とてもこぼもでは表現できないものであった。成人している子どもたちも、同行すると訴えられたが許されなかった。ただ、幼い弟で父の懐を離れなかったものだけは、あまりにも泣きさげばれるので、同行を許されたが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

e 残された北の方や子どもたちは、たいそう呆然としてこぼも出ないほどであった。正装した子どもたちも、同行すると訴えられたが許されなかった。ただ、幼い弟で父の懐を離れなかったものだけは、あまりにも泣きさげばれるので、同行を許されたが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

問十二

傍線部⑩「御前の池、遺水も、大卒居明びて、心もゆかぬさまなり」とは、どのような様子か。最も適当なものを、次のイ～ホから一つ選び、その符号を答えなさい。

イ 源氏の左大臣家の池も遺水も、秋の趣き深い風情で、都を離れたい様子
ロ 源氏の左大臣家の池も遺水も、荒廃した風情で、納得できない様子
ハ 源氏の左大臣家の池も遺水も、咽ぶように泣いて、気が晴れない様子
ニ 式部卿官家の池も遺水も、秋の趣き深い風情で、都を離れたい様子
ホ 式部卿官家の池も遺水も、荒廃した風情で、納得できない様子
ヘ 式部卿官家の池も遺水も、咽ぶように泣いて、気が晴れない様子

問十三

傍線部⑮「身をかへさせたまへる」とは、誰がどうなったことか。最も適当な説明を、次のイ～ホから一つ選び、その符号を答えなさい。

イ 源氏の左大臣が、命を失ったこと
ロ 源氏の左大臣が、出家の身になったこと
ハ 源氏の左大臣が、不遇になったこと
ニ 式部卿官が、命を失ったこと
ホ 式部卿官が、出家の身になったこと
ヘ 式部卿官が、不遇になったこと

問八

荒れ果てた邸内で、式部卿官はどんな様子であったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 式部卿官は、荒れ果てた庭をしみじみとした思いで、夕暮れになってもずっとご覧になっておられるにつけ、かつてのはなはなしかつたお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、今のお暮らしのまま出家なさったことは、おいたわしくおそれおおいことであった。

b 式部卿官は、荒れ果てた庭をしみじみとした思いで、夕暮れになってもずっとご覧になっておられるにつけ、かつてのはなはなしかつたお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまったことは、感慨深くありがたいことであった。

c 式部卿官は、たいそうつらく悲しく間の夜をさまようようなお気持ちでお暮らしであるにつけても、かつてのはなはなしかつたお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまったことは、おいたわしくおそれおおいことであった。

d 式部卿官は、たいそうつらく悲しく間の夜をさまようようなお気持ちでお暮らしであるにつけても、かつてのはなはなしかつたお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまったことは、感慨深くありがたいことであった。

e 式部卿官は、たいそうつらく悲しく間の夜をさまようようなお気持ちでお暮らしであるにつけても、かつてのはなはなしかつたお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまったことは、感慨深くありがたいことであった。

